



福島放技ニュース

THE NEWS OF THE FUKUSHIMA ASSOCIATION OF RADIOLOGICAL TECHNOLOGISTS

2010

9月15日号

122
VOL.

発行所 社団法人 福島県放射線技師会

〒960-8003 福島市森合字蒲原16-7 TEL/FAX 024(559)1043

ホームページアドレス <http://fart.jp/>

巻頭言

放射線技師の 将来に向けて



副会長 齋藤 康雄

近年にない連日の猛暑で、生活にも大きな影響を与えている。最高気温の更新や熱中症は連日ニュースにもなり、季節の野菜は高騰し、海水温の上昇で近海では秋刀魚も捕れなくなっているようだ。

熱いのは気候ばかりではない、日本放射線技師会の新執行部の熱い思いが以前に増しているといわれてくるようになった。中澤新会長が采配を振る執行部には、片倉監事が常務理事として、鈴木会長が理事として参画していることもあると思うが、中澤新体制が掲げている「3C」が実践されているからであろう。会長が変わる度に寄せられる期待が崩れてきただけに、刷新された執行部に対する思いは強い。我々が今まで訴え続けてきた事業運営に対する声が具体化しようとしている。まさに、旧体制からの脱皮と言うべきであろう。かといって、今までの体制を全否定しているわけではない。会に対する思いは同じであったろうし目指すところに違いはなかったはずだが、手段が少しばかり会員の意向に沿っていなかったように思う。

問題はあったかも知れないが、会員が今まで苦労して取り組んできた研修やセミナー・講習会など、その成果が少しずつ出てきている事実もある。その一つが今回の診療報酬の改定で、デジタル撮影に加算ではなく基礎点数が付いたことだ。70%が満たされれば加算はなくなるが、基礎点数はよほどのことがない限り下がっても無くなることはない。電子化の現状からして当然のことかも知れないが、画像診断における放射線技師の重要性の評価とも言われている。4月30日付けで出されたインパクトのある通達もそうだ。厚生労働省医政局長からチーム医療の推進についての通達が出されたことをご存じの会員も多いと思われる。患者さんを中心に進める医療において、医師以外の医療スタッフが実施することができる業務内容の具体例として、『診療放射線技師は放射線治療・検査・管理や画像検査に関する業務が拡大する中、当該業務の専門家として医療現場において果たし得る役割は大きいものとなっている。

以下に掲げる業務については、現行制度の下において診療放射線技師が実施することができることから、積極的に活用することが望まれる。

画像診断における読影の補助を行うこと。

放射線検査等に関する説明・相談を行うこと。』

厚生労働省は、今までの経緯から放射線業務の専門家と認めたと「やって貰いたい」と言っているのである。躊躇無くその期待に応える義務がある。それが国家資格を持った者の役割であり使命であると思う。今までも我々は当然のこととして、放射線や検査に関する説明相談を行ってきたし、相談を受けられるような知識を得るための研修会や講習会を実施しているが、今後は客観的に評価できるような形での実施が求められてくるだろう。読影についても講習会などを通じて習得に励んでいるが、自分の行った撮影や検査には報告書を付けられるくらいの読影能力と施行責任が問われてくるだろう。

新執行部は、都道府県放射線技師会との協力体制を今まで以上に密にして事業を進めていくことを掲げている。日本放射線技師会とも協力し、撮影・検査技術の習得はもとより、実践的な読影力の向上や報告書の書き方などの研修も必要になるだろう。課題は多いが、診療放射線技師の将来がかかっているといっても過言ではない。

「リレー・フォー・ライフ2010in福島」に参加

去る9月4日(土)13時から翌日の9月5日(日)12時30分まで、福島県で初めて開催されたがん患者支援のためのチャリティー・イベント「リレー・フォー・ライフ2010in福島」が医大陸上競技場で開催されました。福島県放射線技師会も協賛し、有意義な素晴らしい大会参加となりました。

この「リレー・フォー・ライフ」とは、1985年にアメリカ・ワシントン州で、アメリカ対がん協会のゴルディー・クラット医師が始めたイベントで、がん征圧を目指すための資金を集める事が目的で始められ、それと共に地域社会全体でがんを闘うための連帯感を育む場として大きく広がり、現在では全米4,000箇所以上、世界20カ国以上で行われるようになりました。日本では2006年につくば市で開かれたのが最初で、毎年全国各地で開催されるようになり今年、初の福島開催となりました。

チャリティー・イベントは、がん患者や家族、その支援者らがグラウンドを会場に交代で24時間にわたって歩き(がんは24時間眠らず、がん患者は常に闘い続けていることからきています。)、がん抑圧への願いを新たに深めあうもので、私たち技師会チームも各時間帯それぞれ交代でリレーをとぎらすことなく、24時間歩き続けました。

今回の技師会の参加メンバーは、特に医大が中心となり合計25名でチームが構成されました。遊佐烈副会長の元、会場のテント設営や準備など全員が団結し準備を進め、気温35度を超す、突き刺すような猛暑の中、汗だくで倒れそうになりながらも皆が必死に交代で歩き続けました。

また、今大会のシンボルである技師会のチームフラッグは、新人会員の長澤陽介君を中心とした数名のスタッフで作成され、「太陽と月」をモチーフとした夢の溢れるデザインが参加者の目をひいていました。そのフラッグと共に福島県放射線技師会の「のぼり」を大きく振りかざしながら、皆が楽しく元気にアピールしていた姿がとても印象的でした。

夕食には医大の佐藤勝美さんが提供して下さったキノコをふんだんに使った「特製キノコ汁」が振舞われ、会員の疲れも一気に吹き飛びました。日が沈むころにはキャンドルライトセレモニー(ルミナリエ)が行われ、一人一人の思いの言葉や絵が描かれたルミナリエがろうそくの光で灯されました。競技場のトラックと、その中心に描かれた「HOPE」という文字がオレンジ色のやわらかい灯りで一晩中灯され、会場全体があたたかい雰囲気包まれているようでした。

夜になると日中とは一転し、寒さを感じるくらい冷え込みましたが、若手のメンバーが眠気を堪えながら交代でチームフラッグを繋いでくれました。夜間には、鈴木憲二会長や看護師さんから食べ物の差し入れや激励があり、更に歩き続けるパワーとなりました。

この福島での開催には、60を越す参加チームがあり、実行委員、ボランティアを含め延べ3,000人が参加され約730万円の寄付が寄せられたそうです。

今回のリレー・フォー・ライフは、患者さんやそのご家族、そしてがんで大切な方を亡くされたご遺族の心を支えるための優しさに溢れた、力強さを持ったイベントでした。福島県放射線技師会が参加できたことはとても意義深いことで、感謝しています。

参加された皆様、本当にご苦労さまでした。そして応援・励ましに来て下さった皆様、大変にありがとうございました。(池田)



訃報

長年にわたり本会理事として功績を積み、叙勲された名誉会員中川皐氏が、去る8月28日、事故により急逝されました。謹んでご冥福を祈ると共にお知らせ致します。



「第9回東北MRI技術研究会」「第10回福島県MRI技術研究会」開催される

平成22年7月10日(土)コラッセふくしまにおいて、第9回東北MRI技術研究会・第10回福島県MRI技術研究会が開催された。

今回は東北MRI技術研究会が本県開催であることより、福島県MRI技術研究会と同日開催となった。内容は学術講演『EOBプリモピストの使用法とその効果』、情報提供『乳腺診断ガイドライン～撮像法の標準化に向けて』山形大学医学部附属病院 伊藤由紀子先生、ワークショップ『上腹部を上手く撮る』と題して、青森県立中央病院 佐藤兼也先生、宮城県南中核病院 坂野隆明先生、新潟大学医歯学総合病院 内藤健一先生、盛岡赤十字病院 川原 猛先生の4名に発表していただいた。



教育講演は『腹部領域でみられるアーチファクト』と題して、磐田市立総合病院 放射線技術科 寺田理希先生より具体例を交えながらアーチファクトについてわかりやすく講演していただいた。特別講演は『上腹部MRIのPitfallと撮像法の最適化～EOB・プリモピストを中心に～』と題して、慶応大学 谷本伸弘先生に実際の症例を呈示しながらわかりやすく講演していただき、大変有意義な内容となった。会場は東北各県からの多くの参加者で熱気ある研究会となった。(今野)

支部だより

会津支部

「平成22年度乳ガン検診研修会」開催される

7月29日(木)山鹿クリニックにおきまして、会津地区全域の平成22年度乳ガン検診研修会が開催されました。この研修会は、会津若松医師会が主催となって毎年開催されており、医師はもちろんのこと診療放射線技師や看護師・検診関係者なども参加している、職種を越えた研修会となっています。

今回は、福島県立医大の名誉教授の阿部力哉先生にお越しいただいて、「福島県乳ガン検診の現状と検診に関する問題点」と題して、大変貴重な講演を聞かせていただくことが出来ました。それによると、乳ガン検診の重要性は非常に高く、臨床期前乳癌を発見することが出来て、これは感度と特異度が優れており、治癒率とQOLの上昇につながっているとのことでした。また、早期発見と早期治療の利益として、特に50～74歳において効果が一番認められるとのことでした。しかしながら、早期発見と早期治療に関する弊害が起きている様で、ドックなどの集団検診における乳ガン過剰診断はおおよそ3例に1例ほどの割合で発生しているとのことであり、また、乳ガンではないかもしれない患者に対する念のためのbiopsy実施の危険性を報告していました。

乳ガン検診の重要性と早期発見の利益が叫ばれている一方、いろいろと弊害が起きてきていると言う現状を知ることが出来て、非常に有意義な時間を過ごすことが出来ました。(森谷)

県南支部

去る7月31日(土)JR郡山駅前ビックアイ7階大会議室において、毎年恒例となっている県南支部主催「サマーセミナー」が開催されました。



技術講演では、「CT装置の機構および画質を決めるパラメータ」と題して東芝メディカルシステムズ株式会社営業推進部CTクリニカル担当小竹啓介氏による講演がおこなわれました。MDCTの原理の基本から画質構成原理、補正、画質に影響を及ぼす因子についてわかり易く解説をしていただきました。

教育講演では、「平成24年度診療報酬改定に向けての方向性について」と題して富士フィルム株式会社ヘルスケア事業統括本部医療政策グループ担当課長岩田貴氏による講演がおこなわれました。4月からの新診療報酬改正の意味と今後の動向をふまえ、我々診療放射線技師がどのように心構えていくべきかたいへん考えさせられる内容となりました。

2講演共に事前に会員より質問を受け付けておりましたが、当日も会場より多数の質問がよせられ、会場の使用時間いっぱいのたいへん盛り上がった内容のセミナーとなりました。その後に開催されたビアパーティも様々な意見交換がなされていました。(本間)

浜 通 支 部

「第10回いわき地区画像研究会勉強会」開催される

平成22年6月22日(火)いわき保健福祉センターにおいて第10回いわき地区画像研究会勉強会が開催されました。今回は学術研修会として、『コニカミノルタFPD装置とマンモCAD』と題して、コニカミノルタヘルスケア(株)柴崎 浩司先生、『DPC導入による画像診断に与える影響 ~後発造影剤の役割を交えて~』と題して、コニカミノルタヘルスケア(株)細井 候利先生に講演をしていただいた。両演題とも放射線技師にとって疎かに出来ない内容であり、特に後発造影剤についてはDPCの流れの中で避けて通れない重要な事柄でもあり、わかりやすく説明をしていただき、大変有意義な研修会となった。

(今野)



「浜通り支部夏期学術研修会」開催される

平成22年8月28日(土)14:00~リフレ富岡において浜通り支部夏期学術研修会が行われました。今回のシンポジウムは「当院におけるPACSの運用状況」と題しまして各施設の発表が行われました。

シンポジストとして折笠秀樹先生(いわき市立総合磐城共立病院)、佐藤貴晃先生(福島労災病院)、森下克彦先生(かしま病院)、安藤茂樹先生(いわき泌尿器科病院)、横田清志先生(県立大野病院)、牟田真一先生(南相馬市立病院)にPACSの導入時の仕様書の重要性、導入費用対効果、概要、運用上の不具合、危機管理など具体的な例を交えた内容の濃い発表となった。

また、特別講演は「当院のPACS導入からフィルムレス化、検像の運用やWebQueryの活用など」と題して公立岩瀬病院 放射線科 福田 和也先生に御講演頂きました。放射線画像だけではなく内視鏡、超音波、病理のデジカメ画像、心電図、肺機能などの画像の取り込みや、検像システムやWebQueryなどを実例を交えながらわかりやすい内容であった。その後、演者全員がステージに上がり質疑応答が行われ、日常業務で使用しているPACSについて各演者から多義にわたる内容であったこともあり、会場からの質問も多数よせられ活発に質疑応答が行われた。これから導入を考えている施設に十分参考になる有意義な研修会となった。(村上)



編 集 後 記

今年の夏は異常に暑い。猛暑日(1日の最高気温が35以上の日)が過去最高クラスだという。6月26日にはなんと今年初の猛暑日を北海道の帯広、北見市などで記録した。私の住む相双地区は比較的夏は過ごし易い土地がらであるが今年に限っては毎日エアコンの稼働日が多かった。夏野菜の葉物は高値つづき、季節のさんまもこの暑さのせいかな不漁という。涼しい日はまだまだなのだろうか。庶民には厳しい夏である。(村上)